

### クラウン・ホール 1956年 ミース・ファン・デル・ローエ

#### 一室無限定空間の可能性

ナチス政権の圧迫が一段と強化した'33年、校長ミースはバウハウスの閉校に追い込まれる。個人の活動も制約され、'37年末に招かれて渡米すると、翌年、シカゴの建築家の推薦でアーマー工科大学の主任教授に就任する。その翌年、同校は別の学校と合併してイリノイ工科大学（略称IIT）となり、キャンパス計画を任される。鉄鋼生産を含む工業都市でもあり、19世紀末に鉄骨造の高層建築が勃興したシカゴが活動拠点となったのは僥倖であった。

'38年から始まるIITキャンパスの全体計画は校舎、施設群をすべて鉄骨造とし、10数年かけて実現していく。24ft×24ft×12ft高のモジュールで敷地全体を覆い、校舎相互の関係性、外部空間の流動性を追究し尽くし、'40年に配置計画を定めた。ミースの建築観の根底には科学技術を重視し、時代精神の発露志向がある。鋼構造による建築空間の追求はそれに適う格好の対象であったであろう。

クラウン・ホールは建築と都市計画、デザインの3学部  
の校舎で、完成は'56年、キャンパス最後期の建築である。半地下1階、地上1階の構成で、下階の採光のために地上1.8mにした床上に、36m×66m×天井高さ5.5mの無柱の大空間が広がる。半地下は6m×9mグリッドで柱が建つRC造。その箱に外接して、スパン36mのプレート・ガーダーを両端で支えるH型鋼の柱で門形を構成し、桁行18m間隔で4組建て、両端部を6m持ち出した屋根のジョイントスラブを吊り、その架構の四周をガラスで包んでいる。

南北両面、中央スパンに入口を設けた。日が当たる南面には中間レベルに踊り場テラスを設定し、古典的な正面性と記念性を端正に表出している。

内部は、中央ゾーンに一对の地下に至る階段と天井裏へ昇る空調ダクト、左右、前後に空間を分ける低い壁を設けているが、全体はひと繋りである。各学部、各学年の製図室であり、余裕のある空間が領域を分け、空間容量が大きく音は拡散して気にならず、学生同士の交流は自由にできる。天井の高い開放的なこの空間に身を置くと、気持ちが伸びやかに解放され、創造の場にふさわしいと実感する。

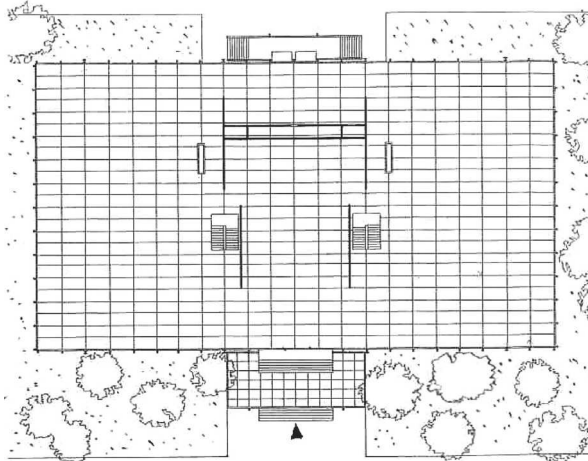
半地下は天井高3m程で、固定壁やガラススクリーンで仕切った教室と図書室、研究室、工作工房、事務室等があり、階段周りは談話ラウンジで、上階の一室空間を支える。

床と天井が平行の無限定空間は機能変化に 대응できるユニバーサルスペースと呼ばれ、20世紀後半に、世界の様々な建築に適用普及し、やがてその均質性が批判対象になる。

クラウン・ホールは、校舎としての確固たる独自性の内に、普遍的なユニバーサルスペースの可能性を示唆する初期の建築空間である。



南側外観 正面階段とテラス状の踊り場はトラバーチン仕上げ



1階平面図



内観製図室 ガラス面の下部は乳白ガラス 上部は透明 ブラインド付き



左:外部サッシュ周り 3mピッチのH型鋼の方立補強 下部は半地下の採光窓 右:半地下の談話ラウンジ。右側は図書室